

「主がお入り用なのです」

ゼカリヤ書
マタイによる福音書

第9章9節～10節
第21章1節～11節

説教 村上修平牧師

主イエスと弟子達はエルサレムをめざして歩きました。もうすぐユダヤ人にとって最も大事な過越（すぎこし）の祭が近づいていたからです。過越の祭に、巡礼者達は各地からエルサレムに上り、神殿で神様に犠牲を捧げました。主イエス達も故郷のガリラヤを去り、エルサレム近郊まで来ました。オリブ山沿いのベテパゲという町に着くと、主イエスは二人の弟子を遣わして言われました。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつながれていて、子ろばがそばにいるのを見るであろう。それを解いてわたしのところに引いてきなさい。もしだれかが、あなたがたに何かを言ったなら、主がお入り用なのです、と言いなさい。」(マタイによる福音書21章2～3節)

主イエスはこの時に「子ろば」に乗ってエルサレムに入場することを決意され、前もって準備をしておられたようです。この祭の最中に主イエスはユダヤ人達に捕らわれ、殺されることになるだろうと知っておられました。この大切な場面で、主イエスが選ばれた乗り物が、「子ろば」だったのです。なぜ、子ろばなど選ばれたのでしょうか？主イエスが神の子であるならば、もっとふさわしい乗り物があつたはずです。当時、一番高級な乗り物は馬でした。王様や偉い人達はみな最高の馬に乗ったのです。

主イエスがエルサレムに入場された時、群衆は、「ダビデの子に、ホサナ」(9節)と叫んで、主イエスを歓迎しました。ダビデはイスラエルが最も繁栄した時代の王様の名前です。主イエスはこのダビデの子孫としてお生まれになりました。主イエスが、かつてのダビデ王のように、強い武力によって異邦人の支配からイスラエルを解放してくれることを群衆は期待し、「ホサナ」(『お救い下さい』の意味)と叫んだのです。また、過越の祭は、エジプトでの奴隷の生活から神様によって救い出されたことを思い起こす時でしたから、群衆の民族意識も高揚していたと思われる。彼らは棕櫚の木(なつめやし)の枝を切ってきて、主イエスの通られる道に敷きました。棕櫚はイスラエルを代表する木で民族のシンボルでもあります。

もし、主イエスが群衆の期待に応えようとされたならば、絶対に“馬”を選ばれたはず。敵と戦う時は、足が速くて体格の良い馬が使わ

れました。ろばは力持ちなので、荷物の運搬や農作業に使われましたが、戦いには適していません。ろばは馬の仲間ではありませんが、ウマ科の動物の中で一番体が小さく、足も遅いからです。けれども、主イエスは馬ではなくて、ろばを、しかも小さな子ろばを選ばれたのです。この時、群衆はもちろん弟子達でさえ、なぜなのか理解できなかったと思います。私達も彼らと同じです。主イエスのお心を理解できずに、『敵を滅ぼして、私の領土を広げて下さい』のような身勝手な期待を寄せていることがあります。しかし、主イエスはそのような期待にはお応えにならず、子ろばを指し示されるのです。

子ろばの背に乗られた主イエスの足は地面につき、視線は立っている人と同じぐらいの高さだったと想像します。主イエスはその人が何を求めているのか、心の中の必要をご覧になるために、その人の高さまで降りて来られるのです。主イエスは弟子達に、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、…僕とならねばならない」(20章26～27節)と教えられました。そして、主イエスご自身、ろばが人のために重い荷物を背負うように、私達の罪の重荷を背負われたのです。主イエスは剣をもって敵と戦うこともできましたが、だまって十字架にかけられながら、敵のために、罪のゆるしを祈られました。

この十字架の出来事の後で、弟子達は主イエスが、「見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は…、柔和であつてろばに乗る。」(ゼカリヤ書9章9節)と言われた預言者の言葉を成就するために来られた「王」であることを知りました。主イエスは子ろばに乗って、仕える僕の姿で今も私達に近づいて下さいます。私達の目の高さまで降りて来られて、私達の罪や悩みを背負い、私達の必要を豊かに満たして下さい。

さて、主イエスをその背にお乗せした「子ろば」は、喜びながら誇らしい気持ちで歩いていたと思います。「主がお入り用なのです」(3節)、つまり主イエスから『ぜひともお前が必要だ』と言われたからです。体は小さく足は遅くとも、主は子ろばを選ばれるのです。そして、主は私達にも今、『お前が必要だ』と呼んでおられるのです。

(記 村上修平)

